

# 2005年度ICU夏期日本語教育 教務報告

教務主任  
鈴木 庸子

## 1. 日 程

### a. 2005年度夏期日本語教育開始までのスケジュール

#### 2004年

- 6月 夏期日本語教育ディレクター、教務主任、文化プログラム主任決定
- 10月 2004年度夏期日本語教育反省会、学生募集開始
- 11月初 講師募集開始  
文化プログラム助手を国際関係学科インターンシッププログラムの中で採用することが決まる。
- 12月 2005年夏期休業中の内装工事により教室確保の必要性が生じたが、最終的に、例年どおり本館が使用できることになった。

#### 2005年

- 1月 教務助手、ラボ助手のリクルート開始
- 3月 25日 願書締切 選考開始
- 4月 合格通知の発送 セクション数、コース担当を決定(仮)
- 5月中 講師に連絡。教科書を送付  
日本人学生ボランティアの募集(文化プログラム助手による)  
最終的な応募者数が確定、セクション数を確定。講師の確定と最終連絡  
事務助手、ラボ助手の承認  
学生グループスタッフ、図書館スタッフ、ILCスタッフと打ち合わせ  
(ILCのコンピュータの入れ替えのため、図書館マルチメディアルーム  
使用を財務副学長に申請。2005年度に限って許可される)
- 6月 学生寮ヘルパーとの顔合わせ、PTの作成、採点をJLPに依頼。  
凡人社に教材を注文、夏期の出張販売を依頼。東京カリフォルニア大学セ  
ンター訪問。
- 6月末 ラボ助手オリエンテーション(図書館、ILC)、PT準備(教務助手)  
サマーコース講師室設営(文房具、視聴覚教材、書籍の引越しを含む)(ラ  
ボ助手、教務助手)

b. 夏期日本語教育期間中および期間後のスケジュール

7月5日(火)	10:00 13:30 15:00-15:30 15:30	ヘッド会議 全体講師会 PT監督者打ち合わせ 講師のための学内オリエンテーション (センター、ラボ、図書館)
7月6日(水)	8:30-11:00 13:00 17:00-20:00	PT実施(I-101,103,104) 歓迎会(於食堂) 判定会議 学生のための図書館オリエンテーションを3回に わけて行う(ラボ助手)
7月7日(木)	8:30 9:00 10:10 10:00-14:00	PT結果発表 作文テスト・インタビューテスト 授業開始 凡人社テキスト販売(本館2階ロビー)
7月8日(金)	朝から 12:00-14:00	テキスト販売(教務主任による) テキスト販売(凡人社)
7月11日(月)	1:30-14:20	ヘッド会議(H206) 学生の問題、クラス移動状況報告 ヨーテボリ大学よりSCJ訪問
7月12日(火)		コース変更最終日 凡人社テキスト販売
7月13日(水)	13:40-14:10	全体講師会、授業見学開始(ほぼ2週間)
7月15日(金)	13:10-15:30	講師懇談会(於アラムナイハウス) バーモント大学より授業見学
7月20日(水)	13:40-14:10	全体講師会
8月1日(月)	9:50-10:10	写真撮影会
8月3日(水)	13:40-14:00 14:10-13:00	全体講師会 勉強会 中国の日本語教育について
8月10日(水)	13:40-14:00 14:00-14:30	全体講師会 勉強会 日本語教育のためのインターネットの利 用
8月11日(木)	12:00-14:00	凡人社書籍販売
8月15日(月)	13:00	コース評価提出
8月16日(火)	8:40-12:40 13:00-15:30 16:00-18:00	期末試験実施 歓送会、学生によるパフォーマンス 成績提出 講師室、教材準備室撤収準備
8月17日(水)	9:00-15:00	講師室、教材準備室撤収、書籍・視聴覚教材のか たづけ
8月31日(水)		コース報告書 提出
9月		成績証明書の発送 2005年度夏期日本語教育反省会

## 2. コースについて

### a. 授業時間

授業時間割は2004年度と同様に1コマ70分、1日3コマ週15コマ合計90コマ105時間である。1コマ目と2コマ目の間の休憩時間を20分、2コマ目と3コマ目の間の休憩時間を10分とした。始めの休憩時間を20分に設定した理由は、前年度この時間に文化プログラムのラウンジで朝食をとる学生が多かったという報告による。昼食の弁当の注文、文化プログラムの申し込み、掲示板の利用などのためには、この20分休憩は有効だったと思う。

1限	8:40-9:50
2限	10:10-11:20
3限	11:30-12:40
昼休み	(60分)
個別指導時間帯	13:40-14:50

### b. コース編成と担当講師、受講生数

コース	セクション	担当講師 (*はヘッド、敬称略)	学生数
C1 (初級1)		*石川素子・小野純	12
C2 (初級2)	A	*有留寛大・永富あゆみ	16
	B	*池田佳子・今井陽子	16
C3 (初級3)	A	*安納恵子・ヒルゆかり	14
	B	*数野恵理・川名恭子	14
C4 (中級1)	A	*後藤多恵・喜志佳子	11
	B	*待鳥直子・末田美香子	11
	C	*濱家優子・中川路子	11
C5 (中級2)		*二宮理佳・松本ゆみ	11
C6 (中級3)		*野中陽子・川上恵理	12
C7 (上級)		*佐藤由紀子・黒川直子	7
C8 (特別日本語)		*江崎裕子・鈴木修子	6
8コース 12セクション		24名	141

コースは例年通り8レベルである。受講生数は前年度より13名多く141名であったため1セクション多くなって12セクションを設けた。受講生のレベルによる散らばりは前年度と同様C2、C3、C4のレベルに人数が集中したため、C2、C3を2セクション、C4を3セクションで構成した。

本来ならばC2(32名)にもう1セクション設けることができれば、より理想的な授業環境を作ることができたと思う。

### c. 使用教材

主教材として初級は『ICUの日本語』、C4は『日本語中級J301』、C5、C6では『日本語中級J501』、C7ではコピー教材と『Kanji in Context, Workbook, vol.1』、C8では『Kanji in Context, Workbook, vol.1』を使用した。これ以外の教材については各コース報告に詳細がある。なおC7ではコピー教材費500円を徴収した。教科書販売は日本語関係書籍の販売会社に出張販売を委託した。販売日以外の日、教務で教科書を預かり販売を代行した。コース変更時の返本は認めず、学生同士で交換するなどの方法で対処した。

### d. 特色ある活動

教科書を中心とした授業内容に沿って、あるいは独立した形で本年度も各コース講師の創意工夫により種々の特色ある活動が行われた。これらの活動はコースに活気を与えるなどのプラスの効果があったと考えられる。詳細は各コース報告および待鳥の報告を参照されたい (p.119, p.145)。

## 3. 受講生

受講生は、一般応募学生81名とプログラムの学生56名および本学教員とその家族4名の合計141名である。プログラムの学生はカリフォルニア大学、ペンシルバニア大学、ポモナ大学からの交換留学生と、ロータリー財団奨学生である平和研究の大学院生である。一般応募者総数は129名、そのうち合格者94名、この中から辞退者が13名であった。

一般応募者の受講目的は、例年と同じく「大学の専門が日本語あるいは日本研究関連である」に集中し、ほかに「日本人もしくは日系人、国際結婚の子弟で両親のいずれかが日本人である」「現在日本で仕事についているため」「日本文化に関心があるため」という理由が挙げられている。

## 4. プレースメントテスト (PT) と学生のコース移動

PTは初日に総合テスト、漢字テストの2種類を行って仮の判定を行い、翌日振り分けられたコース内で作文テストおよびインタビューテストを行って最終的な受講コースを決定した。前年度とほぼ同様の方法だが、正規のコースにならって聴解テストをはずした。初日のPTの結果で指定されたコースが自分のレベルに合わないと考えてコースを移動した学生は28名で全体の20%弱である。

初日のPTで指定されたコースを履修した学生と移動した学生数

	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	
判定通り	10人	23	22	28	9	9	6	6	113 (80%)
上のレベルから移動	2	7	3	0	0	1	0		13 (9%)
下のレベルから移動		2	3	5	2	2	1	0	15 (11%)
計	12	32	28	33	11	12	7	6	141

初級で上のレベルから下のレベルに移動した学生の場合、その理由は基本文法が未習、あるいは習得が不十分だったこと、漢字力が著しく劣り、読み書き能力がそのレベルについていけないことなどである。下のレベルから上のレベルに移動した学生は逆に、文法項目は前の機関で学習済みであるため、繰り返して受講したくないという理由である。たとえば『なかま』の第2巻まで終了しさらに中級教材まで学習した経験のある学生は、テストの結果でC3のレベルを指定されても、このコースに満足しない場合が多い。

なお、東京カリフォルニア大学センターから非公式に、学生が自身の成績に責任を持つのであればプレースメントテスト結果による受講コースの判定から、或る程度の融通性を持たせることはできないか、との打診があった。

## 5. 教務・学習環境および視聴覚教材など

### a. 講師室

講師室（本館 202）の環境は前年度の環境を踏襲した。各セクションに長机 2 本と椅子 4 脚、教務主任机 1、事務助手机 2、電話 3 台（外線用 2 台、内線専用 1 台）、コンピュータとプリンター各 1 台、応接セット、冷蔵庫、食器棚、辞書のための書棚、コピー機 1 台、絵カードなどのキャビネット 1（ERB2-126 から移動）、教材置き場の机 1 を設置した。

夜は施錠し、鍵は教務助手と教務主任が管理した。講師には、本館東口の鍵を全員に貸し出し、夜まで作業ができるようにはからった。

### b. 教材準備室

教材準備室を講師室の隣（本館 203）に設営した。機材は表のように準備・設置した。

機材	借り先と設置者など
コンピュータ 10 台 (Mac 5 台 Windows 5 台)	リース。ILC で設置。机は管財の業者が設置 (すべてインターネット接続)
プリンター 1 台	同上
コピー 1 台	リース。業者が設置に訪れる。
ビデオデッキとモニター 2 セット	ラボ助手が ILC より移動。
CD ラジカセ 4 台	JLP、センターより。ラボ助手が移動。
オーディオカセットデッキ 10 台	ILC より。ラボ助手が移動。
ビデオテープキャビネット	JLP (ビデオ含む)、管財課が移動
オーディオテープキャビネット	JLP (音声テープ含む)、管財課が移動
作業机、応接セット、	管財課倉庫から移動
収納用のキャビネット	管財課倉庫から移動
書棚 2	管財課倉庫から移動、JLP からの図書は助手が収納

コンピュータはすべてインターネットに接続可能となった。視聴覚機材、視聴覚教材、書籍の貸し出しはこちらで行った。

#### c. 教室

本館東棟の2, 3階の12室を使用した。ほかに大教室(H213, H315)、1階の1教室(H108)を予備教室とし、複数セクションのテスト、インタビューテストや取り出し授業、最後の口頭発表などに利用した。本館2階西棟のH251, H252を会話ボランティアの控え室として利用した。H206を会議室、休憩室として使用した。

他に図書館のマルチメディアルームをコンピュータによる文書作成指導、インターネット検索による読解や作文授業、ビデオの授業に、ILC103および104を聴解授業、発音指導のために利用した。ILCのコンピュータ室はコンピュータ入れ替え作業のため使用しなかった。スキット、発表の録画のため、スタジオを利用した。

#### d. 自習およびIT環境

学生がインターネットとワープロを利用するためのコンピュータはラボ助手を自習時間に常駐させるという条件でオスマー図書館の2階スタディーエリアを確保した。プリンターは一般学生と別にサマーコース学生用のものを1台確保した。管理はラボ助手が行った。グループ学習室1室を、通常と同じ利用方法で使用可能とした。

ILC103をオーディオテープ、ビデオ視聴の自習室として開放したが、前年度と方式を変え、予約制にした。理由は利用者が非常に少ないため、ラボ助手の常駐に意味がないと考えたからである。

『ICUの日本語』『日本語中級J301』『日本語中級J501』の音声テープの配信は、JLPのサイトと鈴木庸子の個人のホームページを通じて行ったが、C1のコースには音声CDを貸し出した。

#### e. 視聴覚教材・機材

視聴覚教材の授業のための貸し出しは、教材準備室で講師が各自行った。機材のうちオーディオテープレコーダ、CDラジカセも同様に講師が各自行った。それ以外の視聴覚機材(OHP, ビデオデッキとモニター、コンピュータモニター投影用プロジェクター、8ミリカメラ)は、ラボ助手を通じて通常の授業と同様にILCの担当スタッフ(小島氏)に依頼した。

### 6. 会話ボランティア

例年に倣い、ICUの4月本科生および日本語教授法を学んでいる一般社会人\*に「会話ボランティア」を募り、協力してもらった。「会話ボランティア」は日本語の授業(ビジターセッション)に参加して留学生がロールプレイの練習をするのを手伝ったり、スピーチの聞き手として参加したり、トピックにしたがって意見交換をしたりするボランティアのことである。各コースから会話ボランティアの要請を受けて、事務助手がボランティアリストの学生、社会人を手配した。

担当講師からチューターの要請があった場合も、事務助手が会話ボランティアの中から適切な学生を手配した。チューターは、主に4技能がアンバランスで一つの技能だけ特に練習が必要な場合、運用力があるが文法的に不正確な場合などに手配した。

会話ボランティアの制度は期間中に全コースで2回以上利用され、留学生、講師、ボランティアのすべての参加者から日本語学習、国際交流の両面で高く評価された。詳しくは本報告書末尾の資料を参照のこと。

- \* 一般社会人による会話ボランティア：津田日本語教育センター（財団法人津田塾会）、MISHOP（財団法人三鷹国際交流協会）の日本語教授法コースの受講者を対象とした。コース半ばで社会人の会話ボランティアの要請に応え切れない事態が生じたため、個人の手配を頼って、MIA（財団法人武蔵野国際交流協会）の日本語ボランティアにも協力を依頼した。

## 7. 教務連絡のためのウェブサイトの立ち上げ

講師および会話ボランティアに対する事前説明と連絡のため、教務関係のウェブサイトを立てた。今年度は主に、会話ボランティアがスケジュールを確認するために用いられた。

## 8. 今後の課題

次年度に向けての課題として、3点を提案したい。

### 1) ハンドブックの作成とウェブサイトの立ち上げ

次のような理由から、ハンドブックの作成とウェブサイトの立ち上げが有効である。

- (1) 講師および会話ボランティアなどICU外部の関係者に対する情報提供の必要性が増している。
- (2) コース開始直後に大学の教育環境に慣れる時間がとれないため、教務上のきまりや施設の利用に関する情報などを講師陣に事前に提供しておくことは、開始時の負担を減らし、教育の質を高める。
- (3) 教務主任、教務・ラボ助手が1年交代することが多く、効率的な運営の方法や経験的な知識を、手引き書としてまとめておくことは、コース運営の質を向上させる。

サマーコースに初参加の講師にもヘッドティーチャーを依頼せざるをえない状況が続いていることを考えても、職務内容の詳細で事前に公開できることは公開しておくことがサマーコース全体の質を高めると思われる。

### 2) 講師および助手の待遇の向上

サマーコース期間中の教育負担は、通常よりも高く、すべての講師がオーバーワークとなる。教育の質を通常の授業と同等にするという前提のもと、講師陣の選考も厳しいものになっており、高い質の講師陣に見合う雇用条件を考えることは重要である。「仕事は大学の専任講師以上、待遇はインターンシップ並み」というアンバランスは改善が必要である。

助手については、日本語教育のインターンシップ的な位置づけを考慮することが提案されており（平田 2003）、その位置づけを踏襲することは重要である。また、ラボ助手や文化プログラム助手の場合も留学生教育や国際交流、開発教育などの分野でのインターンシップを考えることが

可能である。このような構想は全学の学生に対して「学び」の機会を提供するという意味がある。また、卒業生が9月の留学の前などに参加できるよう、学内アルバイト以外の雇用形態と待遇を認めることも有益だと思う。なお、学内アルバイトは交通費が支給されないが、サマーコース中は授業が行われていない時期であり、特例として支給するべきである。

会話ボランティアの手配は教務助手が行ったが、この仕事は、講師と日本人学生の間にとって講師の意向を学生に伝えたり、学生からの質問に答えたりするなど、事務的な作業の範囲を超え、教育補助の仕事と言える。特に、チューターの手配にいたっては、求められている教育内容とチューターの資質を見極め、場合によってはアドバイスを与えるなど、教師の役割を担っている。今後会話ボランティアの手配の仕事を、「事務的な仕事」とせず日本語教育インターンシップとして位置づけると良いのではないかと考える。

### 3) 機材、ソフトウェアの整備

いくつかの機材やソフトの整備が必要である。今年度のサマーコースでは次の要望に対して、対応ができなかった。

- (1) DVDの録画
- (2) 音声CDの作成とダビング
- (3) MP3ファイルの編集
- (4) 教室で行うプレゼンのためのノートパソコンの貸し出し

JLPおよびILCと話し合いを行い、必要であれば2006年度予算で設備を整えられるとよいと思う。

### 参考文献

平田泉 (2003) 「2003年度ICU夏期日本語教育 教務報告」『ICU夏期日本語教育論集 20』 pp. 3-12

### 資料【SCJ2005 会話ボランティアについて】

\*以下の資料は、事務助手の大野のどか氏の報告書をもとにまとめたものである。会話ボランティアは母語話者として日本語の授業に参加し会話などの作業の補助をするボランティアである。このような母語話者を教室に参加させる授業の形式をビジターセッションと呼ぶ。

### 2005年度の会話ボランティア及びビジターセッション実績

登録総数：106人 [学生] 73人 [社会人] (津田塾会、MISHOP、MIA) 33人  
回数：48回 [学生] 37回 [社会人] 9回 \*セッション平均4回、週平均9回  
参加回数： [学生] 1-10回 [社会人] 1-6回  
チューター：42人 [学生のみ]  
(C1：9人 C2：5人 C3：18人 C4：7人 C5：2人 C6：1人)



セッションは2、3限に入ることが多かった。月曜は少なく、金曜は多かったが、同じ時間帯に2クラスが重なることは時々あった。3クラス以上が重なることは少なかった。3クラスが重なった時や社会人とい学生が同時時間帯に来る時には、手が空いているほかの助手に応援を頼むこともあった。H251と252を待合室にした。説明をする場があってよかったが、冷房が効かない不便さがあった。ボランティアの連絡事項を黒板に貼っておいたり、アンケートを設置できるのがよかった。二つのクラスが同じ時間帯の場合、大勢のボランティアが同時に来るので多少の混乱があった。学生の待合室と社会人の待合室は分けた。チューターは要請に応じて紹介という形をとっていたが、途中から急に要請が増え、マッチングや需要と供給のバランスをとるのが困難だった。予想以上に社会人ボランティアの要請が多くこの要請に応えるのは難しく同じ人に複数回依頼することになった。駐車場のことや、社会人のボランティアのみ手配が必要なこともあるため、コース開始前からいくつかの団体に募集をかけておき、コース開始時には授業予定を組んでおくほうがよい。

## 作業の流れと詳細

### [ビジターセッション]

会話ボランティアは、文化プログラムのボランティア募集と同時に、4月ごろ募集を始めた。コースが始まってから、会話ボランティア応募者にフリーメールで案内やスケジュールを連絡した。コースが始まってからスケジュールが決まり連絡が送れるようになること、フリーメールは1日の送信数に制限があることから、連絡体制が確立され円滑に進むまでに2週必要であった。最終的に水曜までに先生方にスケジュールを確認し、事前に聞いておいたボランティアの予定と照合・調整して、木曜中にボランティアに依頼をするという体制で徐々に落ち着いた。ただし、直前までスケジュールを立てられないまま、ボランティアを待たせなければならなかった点は、問題として残った。スケジュールを教務主任のウェブサイトに掲載し教務主任が管理したが、この点も、事務作業と連絡の効率を下げる結果となった。

ボランティアからの変更やキャンセルが必ずおこるため、当日の混乱を防ぐためにも、どのようにすればより確実にボランティアを招集できるのか、今後とも工夫が必要である。予定管理として今年は、ビジターセッション毎に名簿を作り、3部（先生に配布、教室のドアに掲示、自分の確認用）用意したり、次回のお知らせを書いて渡したり、余裕のある時には直接確認したりした。

社会人ボランティアに関しては、ICUのJLP教員を通じて津田塾会、MISHOP、MIAの日本語教授法の受講生からボランティアを募った。連絡は、学生とは別に用意したメールアドレス（ホットメール）で作業し、学生の場合ほど煩雑ではなかったが、登録人数が少なかったこと、社会人の要請が突発的に入ってきたことから、常に需要過剰の状態であった。この点を改善するには①コース開始前に社会人ボランティアの登録を完了させておくこと（MISHOPのような機関にお願いするのであればなおさら早めに募集の準備をする必要がある）②社会人のビジターセッション日程をコース開始時に決めてしまうことが必要である。

## [チューター]

チューターは基本的には必要に応じて担当講師から個別に一件ずつ依頼され、それに依拠して会話ボランティアに個別に依頼した。数名の要請であれば、大きな問題はないが、コース途中に一つのコースで、クラス全体に先生が呼びかけてしまいそのほとんどから要請が来るといった事態が生じたため、新たに会話ボランティアのメーリングリストで呼びかけざるを得なかった。最終的に 42 人の学生にチューターがついたが、スケジュールが合わず断念したケースもあり、チューターを希望する学生はかなり多い。チューターとなる会話ボランティアとの仲介はほとんど全て助手が行ったが、その際にチューター制度について、どんな事をするのか、日本語教授法の経験が無いが大丈夫かといった質問がよせられた。

## トラブル

- 確認不足から、ビジターセッションの時間とビジターに連絡した時間がずれてしまった。
- 社会人のボランティアのための駐車場の手配に行き違いがあった。
- コース後半から、連絡が付かないボランティアや、予定されているのに来ないボランティアが多少いた。
- 募集の段階で午後の個別指導の時間帯（ビジターセッションはない）が含まれていたため混乱した。この時間帯の参加のみを希望する人もいたり、チューターとの混同も多く見られた。

## ボランティアの声（アンケート結果）

学生と社会人それぞれにアンケートの記入をお願いした。コース中は学生・社会人に簡単なアンケート（①良かった事 ②困ったこと ③意見感想）を、学生には最後に内容の細かいアンケートをメールを通じて行った。データとして完全なものではないが参考として目立った点を以下に記す。

### ◆社会人（アンケート回答総数 26）

#### ① 良かった点

- 日本語学習者に触れ、彼らの興味を知ることができた。
- 学習者の熱心な姿やエネルギーに刺激を受けた。
- 日本語学習者のおちいりやすい誤りに触れることができた。
- 自分自身の日本語教授法の勉強の参考になった。
- 必要なことを良い言葉で伝えることの難しさを知ることができた。
- 色々な人と知り合えた。
- 色々な発見があった。（帰国子女という日本語学習者もいる、学生の積極的な学習態度など）

#### ② 困ったこと

- 英語を使わず、日本語だけで説明することの難しさ
- 相手の関心があることについて、自分の知識が足りず十分な回答ができなかった
- 学生の意見を聞かずに持論を展開してしまった
- ICUの場所がわかりにくい、バスの時間がわからない

- 連絡をするときに、日付と曜日に注意してほしい
- 会話が質問中心になってしまい、うまく進まなかった
- 普段意識しないことについて質問されて答えられなかった

### ③ 感想・コメント

- 自分が学習者の立場で、このような練習の相手がいればよかった

#### ◆学生（アンケート回答総数 27）

##### ①参加のきっかけ・サマーコースをどのように知ったか。

- ウェブサイト（最多）、友人から聞いた、ICUの先生から
- 今年初めて（参加した人も1年生が多かった）という人がほとんどだった。

##### ②参加動機、期待すること

- 異文化交流や良い経験になる
- 日本語教育に関心があって参加（全体の1/3ほど）
- 時間があるからなんとなく
- 英語の先生に勧められて、英語の練習のため
- 自分の留学中の経験から、今度は自分が助ける方になってみたい
  - \* 始めは交流を目的としたが、参加してみて、自分が少しでも役に立てることを重視し始めたという人もいた。

##### ③参加するに当たって心配だったこと

- 日本語教育の経験（自分が話すことがわかってもらえなかったらどうすればいいか、自分の日本語力・正確さ、ちゃんと説明ができるか等）
- 英語に対する不安（最初の連絡が英語だったので心配だった）。
- サインアップした時点で詳細がわからなかったのが不安だった
- 心配なことは何も無かったという人は1/4ほどであった。

##### ④サインアップの時期・方法

- 時期に関しては、今のまま（春学期）でよい
- サインアップしてからの連絡を早くしてほしい（できるだけ早く、もう少し早く、1、2週間前に、申し込み確認のメールだけでもほしい）

##### ⑤連絡手段

- PCメールと携帯メール
- ウェブサイトが必要であると答えた人は全体の1/3弱
- ウェブサイトに時間帯と必要人数を提示し、ボランティアにそれぞれ応募してもらってはどうか、という提案があった。

##### ⑥事前に知っておきたかったこと

- 授業の内容を知っておきたかった（圧倒的）（ボランティアの役割、テーマについて考えておいたほうがやりやすい、クラスのレベルを知りたい、教室を知りたい）

##### ⑦参加してみて困ったこと

- 特になしという回答が多かった。

[具体的なコメント]

「二時間連続の時に、前の授業が長引いて、次の授業に遅れそうになったこと」、「高レベルのクラスでいきなりディスカッションを始めたこと」「C1で予想以上に英語使用頻度が高くて、どこまで使っているのか迷った。」「会話の話題につきた」「直前のスケジュール変更」「最初の週の予定がわかったのが遅かった」「メール中心の連絡だと参加しにくい」「学生に対してどの程度の日本語を使えばよいのかわからなかった。」等

- \* これらの問題は連絡制度の確立／授業内容・レベルを事前に知らせる／担当講師の適切な説明があれば解決しそうなものが多い。

⑧集合場所・時間

- －場所、時間（最初は10分前、遅刻者が多かったため15分前に変更）ともに適切との意見が多かった。
- －授業の都合で、ボランティアを待たせてしまうことがあったので、時間の再確認を行ってほしいとの意見があった。
- －クーラーが効いていないので暑かった。
- －待合室の黒板に情報が張ってあるのが良い。

⑨チューター

- \* アンケート回答者の中でチューターをしていたのは16人（約6割）だった。ほとんどの人はチューターをしてよかった、また是非やりたいとコメントしている。回数と時間は週1回～3回、30分～2時間程度。内容は様々で、会話練習を中心に、その他（漢字、読解の復習、プロジェクトの手伝い、エッセイの添削、授業の復習、ディスカッション、ロールプレイ、テスト勉強など）個別の要請にこたえる形で行われていた。

[具体的な感想]

「クラス参加よりも深くコミュニケーションがとれた」、「学生の思いや日本語学習の動機をすることができた」、「逆に教えられることも多く、自分自身も勉強になった」、「色々な話ができ楽しかった」、「やる気のある学生に触発された」、「一緒に出かけて、仲良くなれた」、一方否定的な意見や要望としては「愚痴や不満を言われて困った」、「学生の要望をもっとはっきりさせてからチューターを選ぶと良い」、「パートナーとの年の差があったので、距離を感じた」、「日本語学習のサポートという側面をもっと強化すべき」、「事前に相手のことをもっと知りたい」、「約束を忘れたり、途中でやめたり、意欲が感じられなかった」、「コースの学生からのフィードバックの機会があれば、チューターにも参考になると思う」「チューターを始める前は不安があったが、やってみてよかった」、「またやりたい」

- \* チューターをしなかった人の意見は、したかったが時間が合わなかったという人が多かった。その他に「英語ができないので自信が無かった」、「参加方法がわからなかった」という人もいたが、チューター制度への関心の高さが伺えた。

⑩意見・感想・要望

- \* 大多数の意見では、「参加してよかった」「是非また参加したい」「良い経験になった」ととても好意的な反応が返ってきた。「来年参加したいか」という質問にはほとんどの人が「はい」と回答している。

#### [代表的な感想]

- \* 自分が native の言葉を話し、外国の方たちが私の話す言葉を学んでいるのを見るというのは初めての経験で、なんだか不思議な気持ちもしましたが、学ぶことは誰にも同じことなんだなということを身にしみて感じ、自分もがんばろうという気持ちになりました。
- \* 色々な国の人たちと実際に話をするのはとても興味深かったし、本当に良い経験になったと思う。
- \* とても楽しく参加できた。先生、スタッフがみな親切だった。
- \* レベルによって教育方針が変わるのはわかるが、日本語が初級だからといって英語を使って解決するのは良いのか、それとも日本語で通したほうが良いのかを考えられた。
- \* 留学生とは普段関わることがほとんど無いので、参加して初めて話すことができた。自分の留学生に対するイメージが変わった（すごく積極的→案外恥ずかしがりやだったりおとなしい感じ）のがとても良かったと思う。
- \* ELPでも留学生がボランティアで来てくれれば良いと思った。
- \* もっと機械的に行われるのかと思っていた。参加してみて学生の熱心さに刺激を受けた。
- \* 最初はただ留学生と話してみたいと思っていただけだったが、コース参加者がそれぞれ努力している姿を見て、少しでも自分の日本語が役に立てばと思うようになった。
- \* 人の話につきあうのが上達した
- \* もっと形式的なのかと思ったが、割とカジュアルで肩肘張らずにできるものだったと思った。
- \* 自分自身の英語学習の体験ではこのような機会（地元の学生との交流）はしたくてもなかった。サマーコースの環境はとてもよいと思う。
- \* 日本語教育について考えたり、日本語という言語を改めて見つめなおす機会になった。日本語教育の実際の現場を見ることができてよかった。
- \* 留学生にわかりやすい日本語を使うように気をつけるようになった。
- \* 色々なレベルのクラスに参加できてよかったが、同じクラスに続けて参加するのも別の利点があると思った。
- \* きれいな日本語を意識するようになった。
- \* チューター制度がもっと積極的に行われると良いと思う。授業だけだとなかなか親しくなれないが、チューターだと学生との交流を深められる。
- \* 今まで留学生と接する機会があまりなかったが、日本語で話せるという気楽さをきっかけとして、様々なバックグラウンドを持つ人と交流できて楽しかったし、海外への興味が大きくなるよい機会となった。もっと留学生にたいして積極的になりたいと思った。
- \* 英語の必要が無くて安心した。

#### [具体的な要望]

- \* もっと具体的な指示が欲しかった（話すスピードはどれくらいか、もし伝わらなかった時にはどうすればよいのか、英語の使用について、授業のくわしい内容など）。
- \* 夏休みに入って早い段階では、コース期間すべての予定が決まっていない可能性が高いので、1・2週間ごとに予定を伝えられるシステムになると都合がよい。

- \* 名札をつけるなど、基本的な情報を提示しあったほうがやりやすいと思う。
- \* 話す内容だけでも準備していきたい。何を話そうか考えている時間がもったいない。

---

このように、様々な課題を残してはいるが、ビジターセッションの制度はICUの学生、サマーコースの学生、社会人、3者にとって非常に有意義なものである。ICUの学生にとっては、様々な日本語学習者と出会い、日本語という言語を外国語として学習する現場を知り、また留学生の声を直接聞く大きなチャンスである。サマーコースの学生にとっても、実践的な日本語の練習になり、教師やホストファミリーとは違う日本の若者や社会人と日本語を使って意見をぶつけあう機会であり、それは新たな学習動機の再燃にもなりうる。社会人にとっては、様々な日本語学習者との出会い、留学生との交流、地域と高等教育機関とのかけはしになる。また社会人を巻き込んでいくことは地域と大学との交流にもなり、双方によりよい効果を生み出す。

参加者の興味は異文化交流と日本語教育に集約される。ビジターセッションで知り合った人と、授業以外での交流を深めたいという声も多く、その点は文化プログラムに期待できるところである。ビジターセッション側と文化プログラム側が協力し合えるとよりよいプログラムが提供できるだろう。